

2019 年 2 月 3 日（日）「婚宴の礼服」

マタイ 22:1-14

1 イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。2 「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。3 王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。4 それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。』」5 ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、6 そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。7 王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。

8 そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。9 だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』10 それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。

11 ところで、王が客を見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。12 そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここに入ってきたのですか。』しかし、彼は黙っていた。13 そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ』と言った。14 招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」

【序論】

子どもの頃によく読んだ『イソップ童話（寓話）』というものがあります。多くの方がよくご存知でしょう。紀元前6世紀に生きたアイソーポス（イソップ）という寓話使いの奴隷がいたそうです。「現在のイソップ寓話集には、アイソーポスのものだけではなく、それ以前から伝承されてきた古代メソポタミアのもの、後世の寓話、アイソーポスの出身地とされる（小アジア）の民話を基にしたものも含まれている」（Wikipedia）ようですが。寓話というのは、動物、生活雑貨、自然現象、様々な人々など、人間の生活に馴染み深い出来事を比喻として用い、物事の真理を教えようとする物語であります。

有名な「北風と太陽」では、一人の旅人のコートを脱がせようと、北風と太陽が勝負をする。北風はコートを無理やり脱がせようとビュービュー冷たい風を吹き付けるが、旅人は意固地になってコートを体に強く巻きつけてしまう。それに対し、太陽はポカポ

カと暖かな日差しで照らし、旅人はもはや必要なしとコートをあっさり脱いでしまうという話です。我が家の子どもたちも祖母と一緒に何度か寸劇をしてくれました。この寓話が伝えようとしている真理とは、(私の解釈ですが) 人の心を変えようと厳しく責め立てても何にもならず、むしろ相手の気持ちを受け止め、理解を示すことで、人の心は和らぎ、ずっとスムーズに事が進んでいくことを教えているのでしょう。紀元前も現代も人間の心というのは変わらない、普遍的な物語であることに驚かされます。

さて、主イエスも幾つもの寓話や譬話を語られた訳ですが、その内容はイソップ寓話よりもはるかに重大かつ深刻な真理を描いていると言えましょう。そこでは人の永遠に関わる問題が扱われている。それを聞く人に応答を求め、自己吟味を迫り、二者択一の道を選択させるものです。

【本論】

本論 1. 招待を断る人々

イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。(22:1-2)

前回の「ぶどう園の農夫の譬(寓話)」と共通する内容が出てきます。それは、主人たる人物がしもべたちを派遣するが、派遣先の人間に殺されてしまうという点です。とはいえ、多くの点で内容は異なっています。今回は結婚の披露宴が舞台となっている。一国の王(父なる神)が王子(御子イエス)のために婚宴を催す。この婚宴とは、神の国(あるいは救い)への招きを表していると思われます。つまり、人が救いにあずかり、神の国の支配に入ることが「キリストとの婚宴」に譬えられているのです。

王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。(22:3)

「招待しておいたお客」とはイスラエル民族を表します。より厳密に言うならば、イスラエルの宗教指導者たちです。「しもべ」とはここでも預言者でしょう。当時、披露宴の食事の用意が整った時に、使いが送られ、客人の家まで迎えに上がるのが慣例だったようです。しかし、招待されていた人々は「来たがらなかった」。王の招待を断ることは、王との対立を意味しました。

それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。』」ところが、彼らは気にもか

けず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。(22:4-6)

王は客人の無礼を一度は許容し、再度しもべを遣わします。今度のしもべはより切迫したメッセンジャーとなりますので、主イエスの先駆けとなったバプテスマのヨハネ、あるいは主イエスの弟子たちが想定されてくるのかも知れません。もう食事の用意は整い、食べるだけという段階に入っている。行くと約束をしていたのだから、無論客人は行くべきです。しかし、彼らはこの世のことを優先し、王の招待を放棄してしまった。それどころか、派遣されてきたしもべを^{なぶ}騁り、殺害するという暴挙に出たというのです。

現実世界ではここまでのことは普通しないでしょう。譬話とは、真理を際立たせるために誇張表現が用いられることが多い。しかし、現実にはバプテスマのヨハネは殺され、主の弟子たちは迫害を受け、ある者は殉教したのであれば、誇張とも言えません。

王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。(22:7)

もはや結婚の祝いとは程遠い顛末となってきています。王（神）の怒りは頂点に達し、無礼を働いた者を皆殺しにしてしまうのです。この事件は、紀元 70 年のローマ帝国によるエルサレム破壊と結び合わされることが多いですが、ざっくり言えば、イスラエルに用意されていた神の祝福が（一時的に）取り去られたと理解しておけばよいでしょう。ここまでの物語の第一幕です。

本論 2. 代わりに招待された人々

そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』(22:8-9)

舞台は第二幕へと進んでいきます。王は大胆にも招待客の変更を命じます。披露宴を中止するのでもない。どうにかこの祝いを成立させるために、そこら中から「本来招待される資格のない人々」を呼び集めよと言うのです。「大通り」とは「交差点」を意味する言葉で、町から郊外へと出て行く出口のような地点がイメージされているでしょう。そこは多くの旅人が往来する。そこに立って、手当たり次第にこの披露宴に招けと言うのです。これまた現実離れした命令ではありませんか。この王はあくまでも父親としての面子にこだわっていると言いますか、何が何でも会場を一杯にしなくてはならないという思いでいます。父なる神様は御子イエスがもたらす救いのためには、そこまでなさるということか。

次に、ここで招待される人々について理解を深めてまいりましょう。

それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。(22:10)

そこで出会った人々は、人種、身分は一切問わない。どんな経歴を持つ人であったとしても、招待にあずかることが可能となります。ここには「恵み」の性質がよく言い表されています。救いには知識・教養は必要ではない。人間的徳や潔癖さといったものも関係がない。そういったものをすべて乗り越えて、救いは万人にもたらされるというメッセージがここにある。事実、主イエスが来られた時、真っ先に救いにあずかったのは、遊女・取税人・罪人という、社会的に見捨てられた人々だったのです。もちろん、正しい生き方を志してきた人が救われないということではありません。「**良い人でも悪い人でも**」とあるように、神の目には如何なる善人も罪人であり、如何なる罪人も恵みにあずかり得る存在だという真理が見えてくるのです。恵みは従来の「差別」という垣根を取り払った。主イエスの到来によって、革命的な時代が訪れたのです。

本論 3. 礼服を着ていなかった人（々）

さて、物語の第三幕に入ります。

ところで、王が客を見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。(22:11)

宴会が始まろうとしています。王が見に来たのは、ふさわしい人々が集まっているかどうかを見定めるためでした。ふさわしいかどうかの判断基準はただ一つ。「**礼服**」を着用しているかどうかでした。この「礼服」とは恐らく、急に呼ばれた客には着替える時間もなかったでしょうから、王が独自に用意して着るように命じた服だったと想像します。汚れた服のままで王の前に出ることは無礼に値する。この「礼服」は極めて暗示的であり、新約聖書で繰り返し現れる「**キリストを着る**」という表現と一致していると思われまふ。私はこの表現を丹念に聖書全体から調べ、長年かけて一覧にしてみましたので、今日ご紹介させていただきます。新約では¹、

¹ 旧約における「キリストを着る」を暗示させる箇所も数多く見つけたので、ご紹介します。

- ・ 創世記 3:21、41:14,42、45:22
- ・ 出エジプト 6:4、20、28:2-5、31-35、39-43、29:5-9,29-30、40:13,14
- ・ レビ 6:3
- ・ II歴代 6:41
- ・ ヨブ 29:14
- ・ イザヤ 61:10
- ・ ゼカリヤ 3:5

- ・ 帰ってきた放蕩息子に父親が着せた最上の着物（ルカ 15:22）
- ・ 「主イエス・キリストを着なさい」（ローマ 13:14）
- ・ 「天から与えられる住まいを着たい」（Ⅱコリント 5:2-4）
- ・ 「新しい人を着る」（エペソ 4:24）
- ・ 「新しい人を着た」（コロサイ 3:10）
- ・ 「白い衣」（黙示録 3:4-5, 18、7:9, 13, 14）
- ・ 「身に着物を着け（ていなさい）」（黙示録 16:15）
- ・ 「きよい麻布の衣」（黙示録 19:8, 14）
- ・ 「自分の着物を洗って…」（黙示録 22:14）

このように、新約聖書には「キリストを着る」「キリストの義を身に纏う」ということが暗示された表現が満ち満ちています。これは何を意味するか。罪ある人間が聖なる神の御前に出る時、自分自身では義を表すことはできない。その汚れを覆うものとして、罪も汚れもない「キリスト」を身に纏うということです。神はキリストの義を見て、私たちの罪を見ることはない。私たちはキリストの義によって義とされるのです。

では、「キリストの義」の衣はどのようにして着ることができるのか。それは、私たちの悔い改めと信仰によるのです。この宴席に連れて来られた人々とは、誰もが参列するにはふさわしくない状態にありました。しかし、王が一方的に与えた礼服を着ることによって、ふさわしい者とされたのです。恵みとは、本来受けるに価しない者が一方的な神の恩恵によって与えられる救いです。そして、それは信仰によってのみ感謝をもって受け取られます。

ところで、王が客を見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここに入ってきたのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ』と言った。招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」（22:11-14）

先に説明しました「恵み」の性質を理解した上で 11-14 節を読みますと、「礼服を着ないで宴席にいる人」というのは、ふさわしくない状態でその場にいることになるでしょう。彼は悔い改めもせず、信仰を表明することもなく神の前に立とうとしている。礼服を着るように言われたが、それを断ったのかも知れません。自分には自分の義があると主張したのでしょうか。そのまま神の御前に立っても自分は大丈夫だと信じていたのか。ここには彼の傲慢が現れています。しかし、彼は聖なる神の御前に立ち果せなかった。礼服（キリストの義）を着ていないということは、神に対して無礼であり、その栄光に

打たれて死ぬほかはないのです。彼は会場からつまみ出され、「暗闇」（地獄を暗示）に放り出されてしまう。そして、二度と神の御顔を拝することはできず、永遠の審きの下に身を置いてしまいました。

注意深くこの記事を読みますと、彼は王（神）の招待には応じて会場に来ていたのです。しかし、せっかく来たのに、礼服は着なかったのです。そういうことが起こり得るのかと。私たちへのメッセージとしてこれを捉えるならば、私たちが真の信仰告白をもって神の御前に立っているかどうかという問いかけとなるでしょう。私たちは罪を悔い改めたか。自分の義に依り頼んではないか。信仰に生きているだろうか。キリストの義に覆われているだろうか。本当に神の招きに応答しているだろうか。一人一人に自己吟味が求められているように思います。

【結論】

今日も主イエスの譬話、いえ、リアリティ溢れる寓話から御言葉を聞きました。これは笑って聞けるような話ではありません。私たちに応答を求め、自己吟味を迫り、二者択一の道を選択させるものです。この寓話では、紛れもない「最後の審判」の様子が描かれています。私たちは恐れをもってこの記事を読み、キリストへの信仰を新たにしたいと思います。これは信者を脅すために語られたものではありません。信者の目を醒まさせ、キリストの義を身に纏っているかどうかを再確認させるための教えです。生ける限りこれを学び、心を主に向け直し、確かな救いの道を歩み続けたいと思います。

【祈り】

聖なる神よ。あなたの招きをひとたび受けておきながら、後になって断る人々の姿を見ました。私たち自身がそのような生き方をしていないかが問われてまいります。私たちの生き方を根本から見つめ直させてください。終わりの日に確かにキリストの義を纏っている者であることができますように。私たちの信仰を堅く保たせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

深い憐れみをもって、人をご自身の支配の下に招き給う、父なる神の愛。

価なき者に義の衣を纏わせ、終わりの日に聖なる神の御前に立ち得る存在とならせ給う、
主イエス・キリストの恵み。

絶えずその心を自己吟味へと導き、悔い改めと信仰とを新たにさせ給う、聖霊の親しき
交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。